

平成22年6月14日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520661

研究課題名（和文） 東部インドネシアに残る巨石記念物の民族学的調査研究

研究課題名（英文） Ethnological Study of Megalith Surviving in East Indonesia

研究代表者

江上 幹幸（EGAMI TOMOKO）

沖縄国際大学・総合文化学部・教授

研究者番号：30320518

研究成果の概要（和文）：東インドネシアの生きている巨石記念物がどのような環境下で存在し、伝統集落の中で活用されているかを踏査し、同時に、当該地域で生き続ける基層文化を記録していく作業を実施した。「生きた巨石記念物」は西ティモール・ラマクネン地方で集中的に残存していることが分布調査で明らかとなった。従来から知られる *Sadan*（石積基壇遺構）とは型式の異なる *Mot* が新たに発見され、慣習法に基づく儀礼が現在も行われている貴重な研究対象の記載という成果を得た。

研究成果の概要（英文）：A survey was conducted to know under what circumstances megalith exist in East Indonesia and the way they were utilized in traditional villages. Traditional cultures remaining in the region were also recorded. Based on the survey, it became apparent that “living megalith” (define here) survive, especially in Lamakunen district. The important results of this research include a newly discovered *Mot* (describe here), which is typologically different from the previously known *Sadan* (piled stone platform) and the record of rituals still conducted based on common law.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 2008年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2009年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：民族考古学 東インドネシア 石積基壇遺構 生きた巨石記念物 製塩
土器製作 ラマレラ捕鯨文化 近代化

1. 研究開始当初の背景

1998年にスハルト体制が崩壊して中央集権から地方分権に移行し、「生きた巨石記念物」をもつ地域もインドネシア社会の変化に伴い文化変容している。「生きた巨石記念物」とともに生き続ける基層文化「土器作り」、「機織り」、「製塩」や伝統的な漁法を用いる「捕鯨文化」などの現状を詳細に記録していくことは急務であった。民族考古学の手法を用いてこれらと共に生きる人々を観察・記録することが最優先と考えて調査を実施した。

2. 研究の目的

本研究では現在も残る「生きた巨石記念物」を民族考古学的方法で調査し、現在までどのような状態で残存し、活用されているかの実態調査を実施し、これらが今後どのような形で残りうるかを解明する。今回は「生きた巨石記念物」とともに生き続ける基層文化②「土器作り」、「機織り」、「製塩」、伝統的な漁法を用いる「捕鯨文化」などを調査対象とし、基層文化の観察・記録を目的とした。

3. 研究の方法

東インドネシア、東ヌサ・トゥンガラ州を調査地に選定し、民族考古学的観点から調査を実施する。東ヌサトゥンガラ州、特にフローレス島、レンバタ島、アロール島、ティモール島を中心に残存する「生きた巨石記念物」をもつ集落の分布調査を実施する。これらの地域で聞き取り、映像記録（ビデオ撮影、写真撮影）、GPSによる測量、遺構の実測を行う。また、伝統的製塩、土器製作、伝統的捕鯨、イカット（織物）製作についても同様な方法で調査を実施した。特に、巨石記念物が多く残存するラマクネン地方では旧王家の全面的な協力のもとに調査を開始した。巨石記念物をもつ伝統的な集落は慣習法が厳し

く、王族の許可なしには入村することも困難であり、そのための祭祀儀礼が執り行われ、これらの儀礼も調査対象として記録に残した。

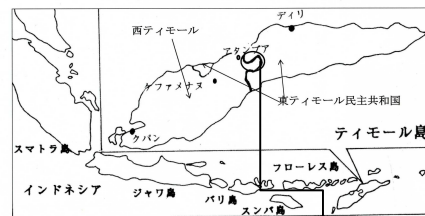
4. 研究成果

本研究では現在も残る「生きた巨石記念物」を民族考古学的方法で調査し、現在までどのような状態で残存し、活用されているかの実態調査を実施し、これに付随する基層文化の記録に残すことに重点を置き、以下のような調査を実施した。

(1) ティモール島西ティモール・ラマクネン地方の巨石記念物の分布調査

1990年代初めに確認されていた巨石記念物を持つ伝統的集落も含め、10ヶ所の集落が確認された（図1）。

ティモール島



旧ラマクネン王国周辺地区

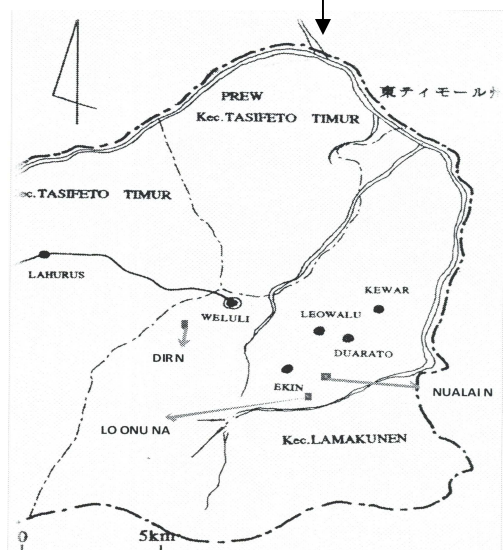


図1 伝統的集落位置図

これらの集落は旧首長国の王によって守られ、現在も慣習法の下で祭祀儀礼が執り行われている。当該地域の巨石記念物は Sadan とよばれる環状石積み遺構と Bosok とよばれる石積み祭壇で構成され、Sadan を取り囲むように慣習家屋が建ち並ぶ。

本調査において、当該地域の巨石記念物が「生きた巨石記念物」として現在も活用され、儀礼などが執り行われていることを確認することができたことは、本調査の最も重要な成果である。

本科研での調査はこれらの集落の中で、未発表であったローヌナ村マクローン・マクス遺跡に焦点あて、調査を実施したが、周辺地域にあるドゥアラト集落、ヌアライン集落、ケワール集落では写真撮影のみの記録保存となった。ドゥアラト集落では 2001 年、新たに萱葺きの慣習家屋を建設したが、不幸な出来事が 2001 年 7 月、ヌアライン集落を襲った。ヌアライン集落はラマクネン地方の中でも最も原風景を残す集落で、Sadan を中心に慣習家屋が 15 棟建ち並ぶ伝統的な集落であった。この集落が放火により 13 棟焼失し、延焼を免れたのは、わずか 2 棟であった。世界的にも重要な文化遺産が放火という手段で焼失したことは非常に残念なことであった。調査者（江上幹幸）が前年度撮影した写真が本集落での最後の記録写真となった。

(2) ローヌナ村マクローン・マクス遺跡での Mot' (Sadan) の調査

マクローン・マクス遺跡は 5 層からなるピラミッド状の石積み基壇遺構であり、ラマクネン地方にある他の石積み基壇遺構 (Sadan) とは形態を異にする (写真 1)。



写真 1 マクローン・マクス遺跡の Mot'

150m×100m の台地上に一基の石積み基壇遺構と Bosok と呼ばれる祭壇 (22 基)、首置きの石 (1 基)、船型の先祖の墓 (1 基) がある。GPS で 150m×100m の台地上にある巨石記念物 (石積み基壇遺構、祭壇、墓など) の配置図を作成し、聞き取り調査により、それぞれの名称、役割を記録に残した。

(3) マクローン・マクス遺跡での生きた巨石記念物の民族学的調査

①ホルゴガワの儀式

この儀式は氏族の中で誰かが、遠くに出かけるときに行われる旅立ちの儀礼。氏族の慣習家屋あるいは氏族が所有する Bosok (半径約 80cm の石積み祭壇) で実施される。今回はマレーシアに出稼ぎに行く若者のために執り行われた。聞き取り調査、写真、ビデオ撮影を実施した。

②ブラフォンの儀式

ブラフォン (Bura hoon) とは氏族の祖霊に対して、供犠をする儀式である。Mot' の頂上部の広場にある祭壇で儀式は執り行われた。今回の儀式の目的は前夜に慣習家屋で執り行われ遺産財確認のための儀礼の報告、および村の年間行事の報告、われわれ調査者が本遺跡を調査実施する許可のための儀礼であった。

(4) ラマクネン周辺遺跡の調査

①ラマクネン郡ディルン村の MAKES 遺跡の調査

②ラシオラット郡ラフス村ファトゥベシ遺跡の調査。

両遺跡とも巨石記念物が残存し、現在も生きた巨石記念物として祭祀に使用されていることを確認した。ファトゥベシ遺跡では、入遺跡儀礼を行いその記録を残すことができた。

(5) レンバタ島とフローレス島の遺跡調査

①レンバタ島ラマレラ村に残る巨石文化の痕跡の調査。

旧村落を囲っていた城壁の残存する部分を探査し、写真撮影および、概念図を作成した。更に各氏族が儀礼時に使用する立石などの巨石記念物を調査した。ラマレラ村に居住する先住民であるラママヌ集落での巨石記念物 (Nuba Nara) の調査を実施し、農耕儀礼の一環として巨石記念物が現在も使用されていることを確認できた。

②レンバタ島イレアペ郡レウオハラ村ジョントナ集落に残る慣習家屋と慣習広場、それに付随する立石などの探査し、巨石文化の保存状態を確認して聞き取り、および写真撮影をした。保存状態が良好であり現在も使用されていることが確認できた。

③フローレス島東フローレス県ララントゥカ郡レオタラ村の慣習家屋と慣習広場、立石などの巨石文化の保存状態を調査し、写真撮影および概略図の作成を行う。現在に至るまで村の儀礼施設として農耕儀礼において活用されていることが判明した。

④フローレス島エンデ県リオ地方のウォガボラ村とその周辺地域の伝統家屋である慣習家屋とそれに伴う巨石記念物の残存状況についての調査。1988 年以來の再訪であ

ったが、予期した以上に慣習家屋と巨石記念物は残存していた。現状の写真撮影と聞き取りのみの調査となった。

(6) 東ティモール民主共和国内での巨石記念物の分布確認調査

山岳地帯のエルメラ町とアイレウ町を訪問したが、巨石記念物を残す村までの到達は国内事情を鑑みて差し控える結果となった。

(7) 伝統的製塩法による製塩村の調査

①インドネシア西ティモール、ハダケワ製塩村調査

②東ティモール民主共和国、ウルメラ製塩村調査

ティモール島東部北岸地方の伝統的な製塩村における製塩法を記録するために、鹹砂装置および製塩小屋の実測、GPS による製塩村概念図の作成、聞き取り調査を実施した。過去に調査した東部フローレス地域の製塩村と立地条件および製塩法の類似が確認された。

(8) 伝統的土器製作村の調査

①アロール島アンペラ村およびレンバタ島ウランドニ郡レウカ村

アロール島、レンバタ島の伝統的土器製作村にて土器製作から野焼き焼成までの行程を記録するため、聞き取り、写真撮影を実施した。両島とも、土器製作村としては歴史的にも古く、アロール島アンペラ村の土器は遠くはフローレス島まで遠距離交易で運ばれている。それに対し、レンバタ島レウカ村の土器は捕鯨村ラマレラ村の女性たちにより、クジラ肉と共に島内内陸部に運ばれ、物々交換財となっている。

(9) レンバタ島ラマレラ村における捕鯨文化の変容

ラマレラ村はレンバタ島にある捕鯨民の村である。プレダンと称する木造帆船を用いて、手投げ銛でマッコウクジラなどを捕獲し、山の民と農作物を物々交換する経済システムを400年維持してきた。ラマレラ捕鯨と物々交換による山民との共生関係を《ラマレラ捕鯨文化》として捉えることができる。

調査をした2007年から2009年は、社会の近代化に伴いラマレラ村でも社会全般や捕鯨、漁法などにさまざまな変化が現れた。漁法については船外機搭載の動力船の普及によって動力船銛漁への転換が図られ、プレダン銛漁が衰退していく過程を観察・記録することができた。また物々交換経済から貨幣経済への移行も緩やかに進行している事実が明らかになった。継続して調査をすることにより文化変容の歴史的流れの記載が可能であるという結論が、ひとつの大きな研究成果として挙げられる。

以上、東インドネシア、特に東ヌサ・トゥンガラ州フローレス島、レンバタ島、アロール島、ティモール島に焦点をあて、「生きた巨石記念物」とともに生き続ける基層文化「土器作り」、「機織り」、「製塩」や伝統的な漁法を用いる「捕鯨文化」などがどのように文化変容しているかをも含め、民族考古学の手法を用いて、これらと共に生きる人々を観察・記録したが、調査はまだ、一部分にすぎない。今後の継続調査を余儀なくされている。21世紀に入り東インドネシア地域もグローバルな画一化した社会現象の影響を受け、急激に文化遺産が消滅しようとしている。前述したヌアライン村での放火による文化遺産の消滅は別として、社会の近代化という波が貴重な文化を変容させている事実は、各地域

とも共通して確認できた。文化変容の過程にあるそれぞれの基層文化を現時点で把握し、消滅の危機にある伝統文化を「人類の知恵」として記録する意義はさらに重要性を増していくと結論できる。同時に、東インドネシアの他地域でも同様な研究調査の必要性を痛感したことも研究成果と考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①江上幹幸、小島曠太郎、インドネシア、ラマレラ村16年間の捕鯨記録と分析 (I)、社会文化研究、査読有、12巻1号、2010、pp. 1-32

②江上幹幸、東部インドネシアの製塩—ティモール島の製塩形態—、東南アジア考古学報告、査読無、7号、2009、pp. 39-45

③江上幹幸、東部インドネシアの製塩—フローレス島東部地域の製塩形態—、東南アジア考古学、査読有、28号 2008、pp. 125-142

④江上幹幸、インドネシア、ラマレラ村の捕鯨と近代化、文化遺産の世界、査読無、24号、2007、PP. 14-17、

[学会発表] (計5件)

①江上幹幸、インドネシア・ラマレラ村の捕鯨文化とその変化、国際シンポジウム 海民・海域史からみた人類文化、神奈川大学常民文化研究所、2010年3月

②江上幹幸、東部インドネシアの製塩—ティモール島の製塩形態—、東南アジア考古学会大会、青山学院大学、2009年11月

③江上幹幸、インドネシアの生きている巨石文化—特にティモール島ラマクネン地域を中心に—、東南アジア考古学会第196回例

会（上智大学）2009年3月

④ 江上幹幸、布と暮らす人たち－東部インドネシアのイカッター、杉野学園公開講座、2008年12月

⑤ 江上幹幸、インドネシア、ラマレラ村の捕鯨記録、日本セトロロジー研究会、第19回大会、2008年6月

〔図書〕（計1件）

① 江上幹幸監修、布と暮らす人たち－東部インドネシアのイカッター、平成20年度杉野学園衣裳博物館企画展カタログ、杉野学園出版部、2008、pp. 1-130

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江上 幹幸 (EGAMI TOMOKO)
沖縄国際大学・総合文化学部・教授
研究者番号：30320518

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし